

岩手県大槌町への健康相談等支援

4月25日から30日にかけて、秋田県からの要請により、岩手県大槌町へ行ってきました。テレビ等で見ていましたが、実際に目にした被災地の姿は、言葉では言い表せないものでした。車両が至る所でひっくり返り、がれきが山のように積まれた光景。大槌町は津波後、火災が発生し、焼け焦げた建物の跡も多く見られました。

市職員による被災地支援活動 市民による被災地支援ボランティア

私は避難所で生活している方々の健康相談や血圧測定、自宅で生活している方々への家庭訪問等を実施してきました。「震災当日のことがよみがえってくる」「地震以降、血圧が高くなった」「夜眠れない」など、多くの方の訴えに耳を傾け、血圧を測ることくらいしかできない自分の無力さを感じました。それでも被災地の皆さんは徐々に笑顔を取り戻し、「よく秋田から来てくれたなあ」と感謝してくれました。笑顔に、勇気づけられた6日間でした。悲しいことばかりでなく、心温まる出来事もありました。満開に咲き誇る桜。みんなの力で

あげた鯉のぼり。被災地は頑張っています。今自分にできることを考え、いつか復興した大槌町をもう一度訪れたい。そう願っています。 市民福祉部健康推進課所属 職員報告

市民ボランティアレポート

宮城県石巻市でのボランティア

4月29日から5月1日にかけて友人5人と国際ボランティア団体のNPO法人JEN(ジェン)に登録し、宮城県石巻市でのボランティアに参加した。

大学の敷地がボランティアのベースキャンプとなり、全国から集まった多くの人がテントを設営していた。驚いたのは海外からの団体が多く活動していたことで、諸外国の関心の高さを感じられた。連休期間でもあり100以上のテントが設営され1000人近くのボランティアがいたと思われる。

石巻市は、被害が甚大で道路はゆがみ、至る所に船やがれきが散乱していた。傾いた家屋の

多くが手つかずの状態、電気水道も、未復旧地区があるようだった。

我々は牡鹿半島方面へ派遣された。一帯は、家屋はほとんどが全壊し、道路だけ辛うじて車が通れる状態。また、近隣の水産加工工場が被災。魚介類が散乱・腐敗し、その臭いが充満していた。そこで、住宅地の復旧作業を手伝った。

活動はメンバー70名が5グループに分かれ、作業の依頼があった家に行き、住居内の泥を土のうに詰め、道路脇に積み上げていくという作業。そういった細かい作業は行政機関ではなく、ボランティアでないと出来ないため、被災者もマンパワーとして必要としている。しかし、この作業は時間もかかる上、体に負担がかかるため、1日に2件を回るのが精一杯だった。

被災地のボランティアは増えてきているが、余震が続き危険と隣り合わせの活動である。だからこそ、情報を収集し、全国からのボランティアを組織し、効率よく供給する機関の存在は大きい。

一方、そのコーディネートする側のスタッフは、不眠不休に

担当は写真の洗浄。テレビでよく見る『思い出捜し隊』の仕事だ。写真は雨風・塩水に浸かり、何が写っているかわからない。表面は溶けだし、傷口を触るような思いだった。大丈夫な物を探して丁寧に洗浄する。ぬるま湯の中で、柔らかいハケで優しく洗う。自衛隊が、がれきの中を掻き分けて探した思いの品を、毎日トラックで持ってきてくれる。

作業中の木村さん



ベイサイドアリーナは南三陸町の拠点。まさに戦場のよう。炊き出しはお祭りの規模。物資は大型トラックで搬入。臨時診療所も開院。各県の救急・消防などの職員が数百人規模で支援に駆けつけていた。2日目、立ちっぱなしの仕事

ボランティアたちのテント(石巻市)



近い状態が続いている。他の行政機関の職員も同様で、彼らは毎日違う人間をまとめ、供給するため、遅くまでミーティングを重ねている。疲労が察せられる。

いずれにしても、復旧には、10年単位の月日がかかると肌身で感じた。短い期間でも、少しずつでも、手伝いを継続する必要があると思う。ボランティアに関心がある方は、是非、参加してほしい。その際は安全も考慮し、個人ではなく公的なボランティア機関を通して、被災者が、今、必要とする活動をするべきと考える。 須田一治さん(関) 報告

は辛い仕事だ。「写真に写っている人は生きてるだろうか？」などと考えながら、帰る場所があるかもわからない写真を洗う。結婚式、家族、修学旅行、賞状、位牌、遺影、我が子の成長の記録。誕生から結婚するまでの、人生の記録が1つのアルバムから出てくる：生きていてほしい。写真洗浄のほかに、棚や洗濯干し場なども作った。道具がなかったが、私を含め職人が何人かいたので知恵を出し合い、協力しながら作業をして完成させた。とても喜んでもらった。 3日目の最終日。胃が痛む。「心にシヨックを受けているからだ」と言われた。午前中、連休とあってボランティア団体がバスで何台も来た。活気が溢れ、「毎日こうだと復興は早い」と皆、口々に言っていた。 作業終了後、別れを告げた。帰るのはとても心苦しい。再びやって来て、必ず復興を見届けたい。そう誓い、帰路についた。 ボランティアとは、手と手を取り合って手間をかけることだと私は思う。難しく捉えず『手間』をかけてみませんか？ 木村慎吾さん(大塩越) 報告

市民による被災地支援ボランティア



今だに白煙が漂う南三陸町

木村さんの活動はホームページでもご覧いただけます http://kimurasakan.nomaki.jp/

宮城県南三陸町でのボランティア

地震から1日考え、なんとかしなければと、炊き出しボランティアを思い立った。炊き出しには人数と資金が必要だが、メンバーは集まらず、資金も集まる手立てがなかった。そのうちに、がれきの撤去などの必要が高まってきた。これならば！と一人で行くことにした。

情報収集は、電話連絡は被災地の負担になるから極力控える。インターネットで被災地やボランティアの情報を収集。必要事項だけ、電話で確認をした。

- *確認事項 1被災地までの走行路線の確認 2被災地周辺の自家用車の通行の可否 3県外ボランティアの受け入れの可否 4短期でも可能か? 5一人でも可能か? 6集合場所・時間 *準備事項 1ボランティア保険へ加入 2滞在分の生活物資 3テント(宿泊場所)

4月27日午前2時に出発。被災地で混乱しないため、路線と必要な燃料のシミュレーションは前もってチェック。 朝6時30分ころ、まるで戦場のような光景が広がっていた。絶句。心臓が握り潰されるような感覚。言葉が見つからない。 7時に南三陸町ベイサイドアリーナ(ボランティアセンター)に着き、9時にボランティア登録を済ませた。